ナンバンギセル（南蛮煙管）

ハマウツボ科ナンバンギセル属　　１年草　日本全土に自生

（写真提供：Ｏさん　撮影場所：
春日大社万葉植物園　撮影日：2011 夏）

特徴

ススキ、ミョウガ、サトウキビ、ギボウシ、ホトトギスなどの根に寄生

８月下旬から９月、根に寄生して花柄を伸ばし先端を横向きに淡紅紫色の花をひとつ下向きにつける。花の形は筒型で浅く５裂、中は黄色い雌しべと雄しべが４つある両性花です。

秋９～１０月に全草を採取し、日干しにして乾燥させる。

薬効・用い方

喉の腫れ、痛み、乾燥した全草を１日量１５～２０ｇ、４００ｇの水で３分の１まで煎じて

１日２～３回に分けて服用

名前の由来

日本にタバコが渡来したのは１５４２年、織田信長・徳川家康にスペイン人宣教師がタバコを献上してから急速に普及した。

そのころ、スペイン人やポルトガル人を『南蛮人』と呼び、その南蛮人がタバコを吸う『クレイ・パイプ』がナンバンギセルの花に似ていることからこの名で呼ばれるようになった。

古くは、万葉集に

『道の辺の　尾花が下の思ひ草　今更々に何か思はむ』

『道の辺の尾花がもとの思ひ草今さらさらに何おか思はむ』

尾花はススキのこと、思い草がナンバンギセルを表わしている。

ススキの根本に生え、物思いにふけるよう横を向いている。

情景のナンバンギセルの生態をとらえた歌が詠まれています。

和歌の上で『思い草』は『忍ぶ恋』を表す植物として使われています。

栽培

ナンバンギセルの種

ススキなどに２月～３月ススキの地下茎が見える程度に土を取り粉末のような種子を根に触れるように蒔き土をかける。鉢は日当と風通しの良い野外に置き土が乾いたら水をやる。

用土は赤玉土４、軽石砂４、腐葉土２の割合で混ぜる。１年草のため、毎年種子を蒔く必要があり、同じ宿主に蒔くと宿主が弱って枯れることがあるので隔年で植えかえるとよい。